宮　絢子先生担当　**半紙臨書課題**

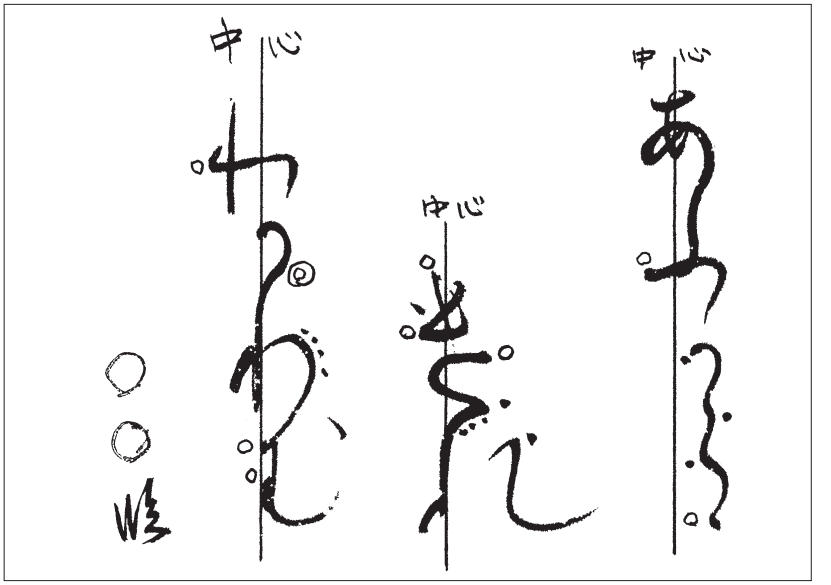
（７月22日締切）出品料440円

升色紙（ますしきし）　第五回

1、**字句**＝「あふ可ら毛」「遣れ」「わ可れむ」

2、**形式**＝**半紙横1/2**を使用。小筆で三行に臨書し、左余白に全体のまとまりを考え「○○臨」と落款を書き入れる。

3、**概観**＝前回までは大筆を使用して筆圧を考えながら丁寧な運筆で「升色紙」を体得してきました。今回は「連綿」です。中でも筆圧をかけた連綿を取り出して学びます。和歌一首の散らし書きの中で、際立った変化となっている「筆圧たっぷりな連綿」に挑戦してみます。



4、**各連綿のポイント**

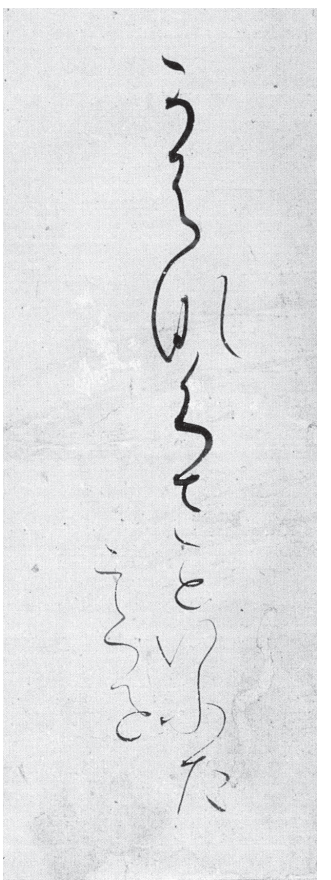
あふ可ら毛　「あ」の三筆目の筆圧のまま「ふ」の一筆目へ。（○）で当たるも、筆圧を変えず二筆目を。終筆は徐々に筆圧をぬき（・）で止まって「可」を。殆ど連綿線はなく「ら」から「毛」の一筆目までを一息に運筆する。「ら」の（・）は止まるところ。「毛」の（○）では当たって一呼吸するところ。

遣れ　「遣」から「れ」への連綿線は殆んどない。「遣」の最終筆を書き終えて、その筆圧のまま（・）で方向転換し、「れ」の一筆目に入る。このわずかな斜め線（…）が連綿線と認められる。当たる（○）、止める（・）に注意のこと。

わ可れむ　「わ」から「可」は前出の通り。「可」から「れ」への連綿は（◎）で速さをおさえ「れ」への入筆の方向を決める。「れ」の（…）に注意。「わ」と間違えないように。（字典参照）ここでも当たる（○）の筆遣いに注意のこと。

☆連綿による行の中心の変化に注意したい。殆んどが右下へ流れる。この傾きが大切である。

条幅随意参考



（二玄社）

『可者那久さといふだ意を』

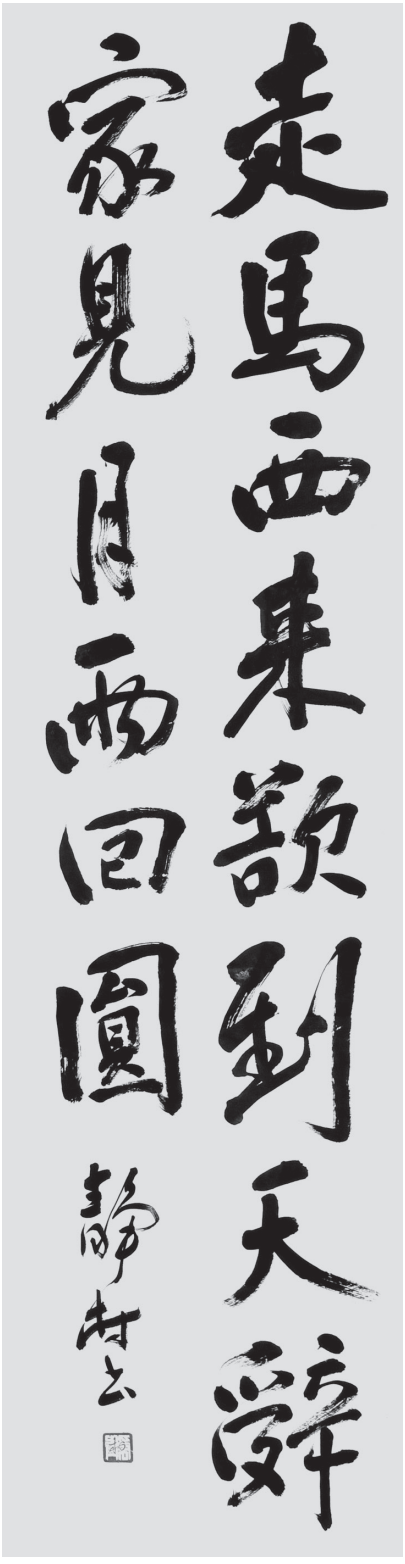
半切一行に収める。特に筆圧をかけている部分の連綿に注意して臨書し、調和を考えて「○○臨」と入れる。

※抜粋可。条幅は一枚目無料、二枚目から五五〇円。半紙随意部（無料）にも出せます。条幅部に出品する場合はバーコード券余白に「**条臨**」と記入。

条幅部漢字課題参考　（七月二十二日締切）

A

鈴木静村先生書



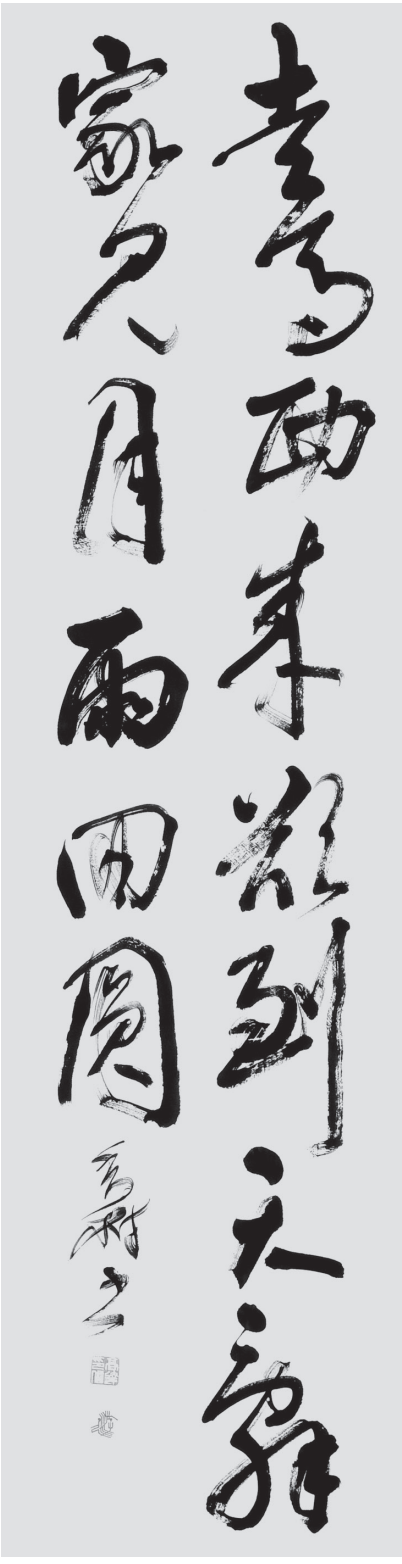
走馬西來欲到天　辭家見月兩回圓（岑參）

馬を走らせて西へ来り天に到らんと欲す。家を辞して月の両回円（りょうかいまど）かなるを見る。

速度を落として、努めて息長くと言いきかせつつ書いた作。単体のむずかしさ（留意点）は「つながり」であり、キレギレに見えたら失敗。墨継ぎは「**到・両**」。**辞**　旁〝辛〟の形古典に多い。**圓**　構えの二縦画に変容の工夫を。

B

髙橋香樹会長書



今回は、草書にてと思い書きはじめましたが、結果的には行草書となってしまいました。「**回**」は、「回」の古文字なので、ここでは「囲」を使用しました。「**來**」の草書は誤字になりやすいので字典にあたって下さい。墨継ぎは「**天**」と「**兩**」としました。

訳…馬を走らせて西へと進んで行くと、地のはても過ぎ天までも上ってしまいそうだ。家を出てから、もう二度も月の丸くなるのを見た。

予告（八月二十二日締切）　**洗竹澆花興有餘（顧況）**

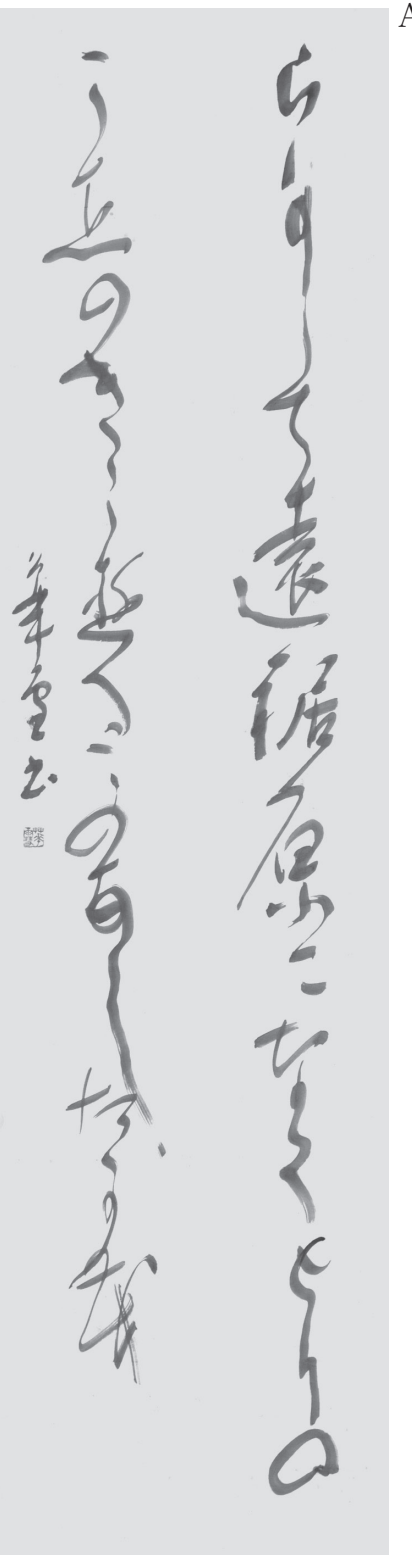
◆**注意**
- 条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条漢を○で囲み（1）と記入する。）
- 二枚目からの出品（バーコード券の条漢を○で囲み（　）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）

条幅部かな課題参考　（七月二十二日締切）

A

平岡華雪先生書

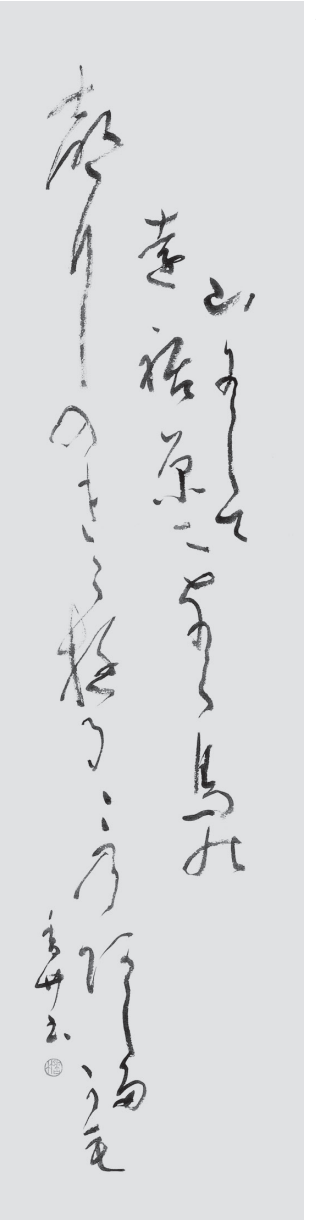
山にして遠裾原に鳴く鳥の聲のきこゆるこの朝かも（島木赤彦）
山尓して遠裾原二な久とりのこ恵のきこ遊るこのあした可茂



B

青柳香竹先生書

山尓して遠裾原二奈久鳥能聲のきこ遊るこ乃阿し多可毛



島木赤彦
（明治九年―大正一五年）
長野県生まれ。伊藤左千夫に師事、アララギ派の中心的歌人。大正三年より赤彦が中心となって短歌雑誌『アララギ』は編集・刊行された。歌集『馬鈴薯の花』『太虚集』『氷魚』等、赤彦全集八巻がある。

学び方

歌意…山の中にいて、遠い裾原に鳴きしきっている鳥の声の聞こえてくる、このさわやかな朝よ。

今回は三行書きです。一行目の「山尓して」と二行目の「遠裾原」が画数が多い文字で、字間が詰まってみえますので、そのことを意識して、三行目を渇筆で表現しました。太・細も入れ繊細な表現に心がけてより丁寧な運筆で書きました。最終句では墨を含ませ右の余白と照らし合わせ、落ち着いた構図としました。

予告（八月二十二日締切）

夕されば野辺の秋萩うら若み露に枯れつゝ秋待ち難し（柿本朝臣人麿）

◆注意
・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条かを○で囲み（1）と記入する。）
・二枚目からの出品（バーコード券の条かを○で囲み（　）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）

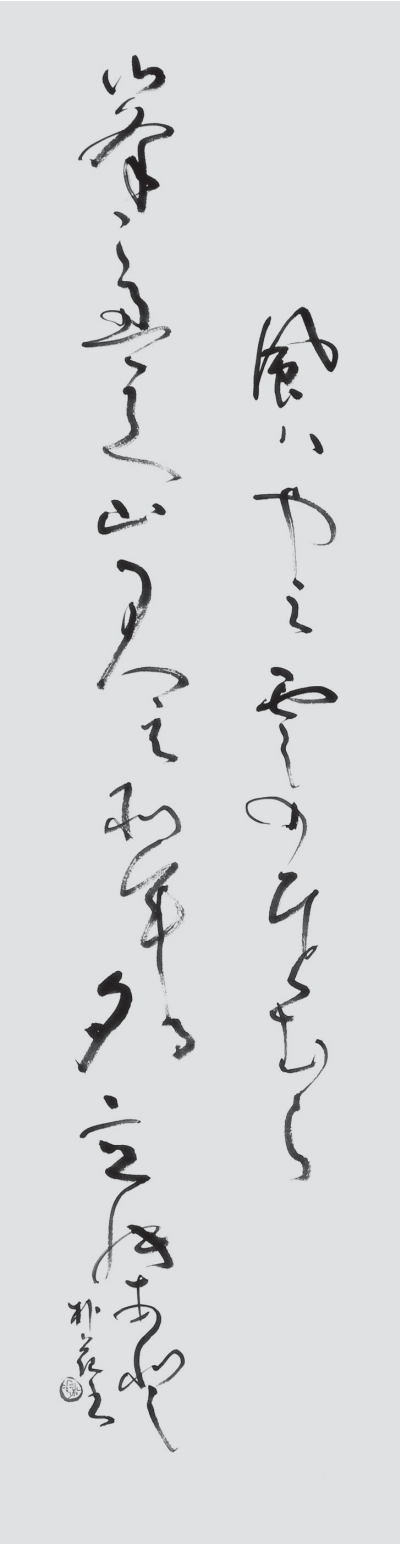
条幅部随意参考

金子裕香先生書

微風閑坐古松（李中）
微風閑坐（びふうかんざ）す古松（こしょう）。

訳…涼しき微風吹く老松の下に心静かに坐す。

向山朴花先生書



風はやみ雲（くも）のひとむら峰（みね）こえて山（やま）見えそむる夕立（ゆふだち）のあと（伏見院）
風八（は）や三雲（みくも）のひとむら峯こ盈天（えて）山見え所牟（そむ）る夕立能（の）あ登（と）

◆注 意　・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条随を○で囲み（1）と記入する。）
・二枚目からの出品（バーコード券の条随を○で囲み（　）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）
※創作部門最優秀作品は随意部参考手本として掲載します。

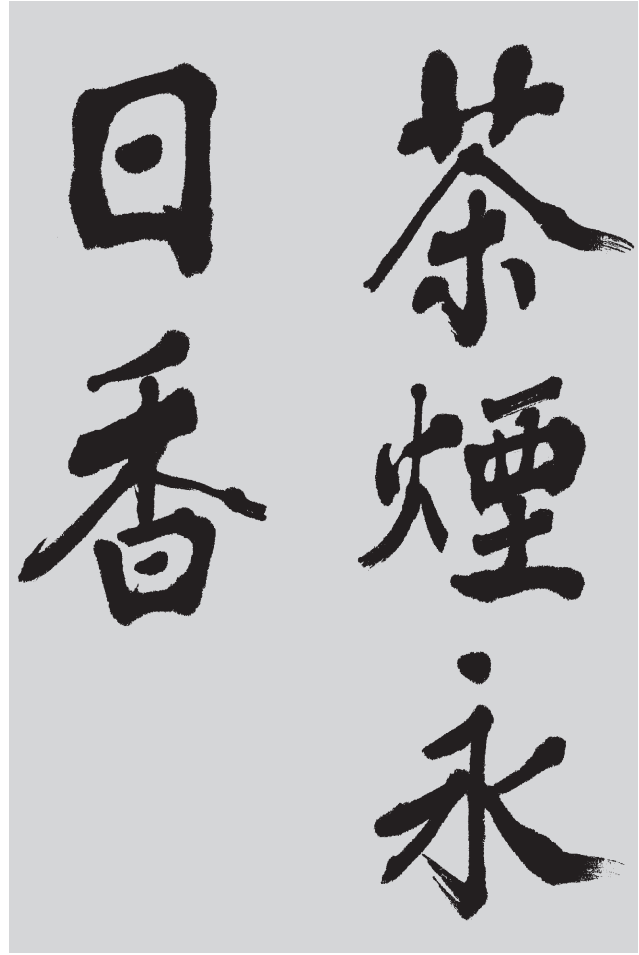
漢字部課題参考　（七月二十二日締切）

平岡華雪先生書

茶煙永日香し（方回）

訳…茶を煮る煙が朝から夕までよい香気を立てている。

〈行意の楷書〉 楷書というと、筆脈一貫性が切れ切れになり易いので、この手本のような行意の楷書から入る練習方法があります。左行二文字の「日」は小さく、「香」も張り出しが少ないので、右行の「**茶、永**」の払いは暢びやかな用筆を。



（八月二十二日締切）　**仁義以利人**

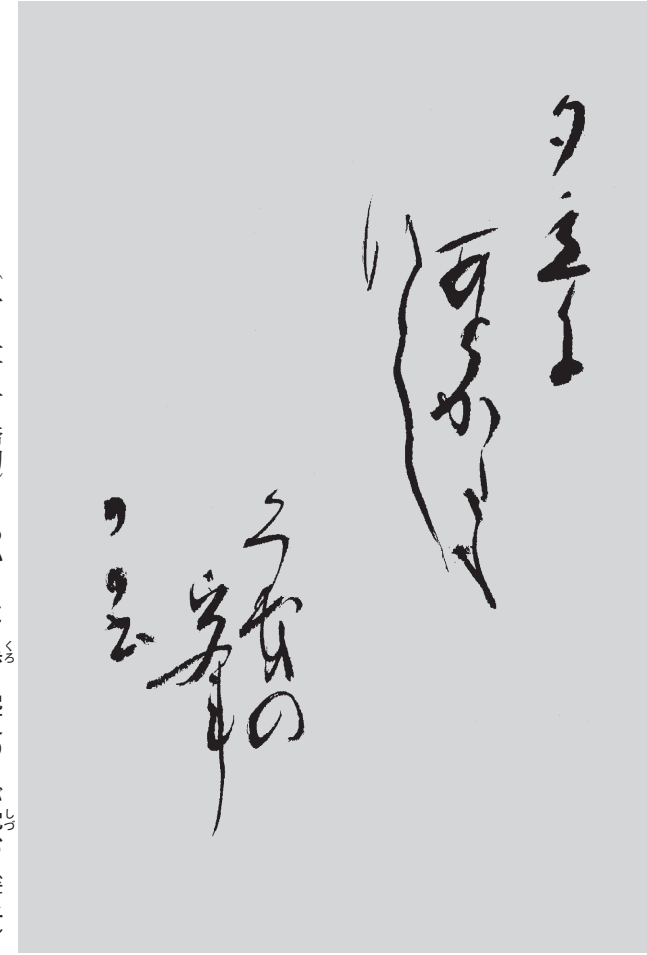
かな部課題参考　（七月二十二日締切）

平岡華雪先生書

夕立にあとかたもなし雲の峰（正白）

夕立尓あとか多も那し久茂の峯

〈全体構成からみるポイント〉 一～三行で右群をつくり、左下の左群と照応しています。特に、右群の右下流しの「し」に対し、左群「峯」の長末画は、左下へのびやかに流し、この二画の照応はこの作品づくりのポイントの一つ。

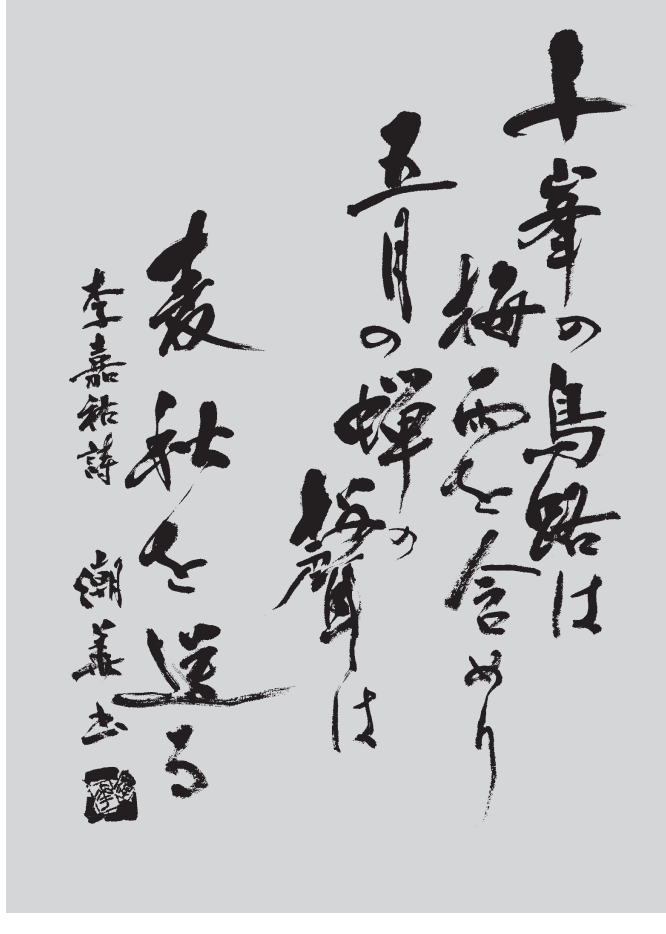


（八月二十二日締切）　**あかくして黒き晩夏の日が沈む（誓子）**

◆**注意**…はじめて出品される方は私製の紙（３×４㎝位）に①～④を記入し、作品左隅に貼付の上、出品して下さい。一般会員は無料、会員外出品料は460円。
①出品部門（例：「漢字部」「かな部」）　②支部名または都道府県名　③氏名または雅号　④新

漢字かな交じりの書課題参考（七月二十二日締切）

水貝潮華先生書

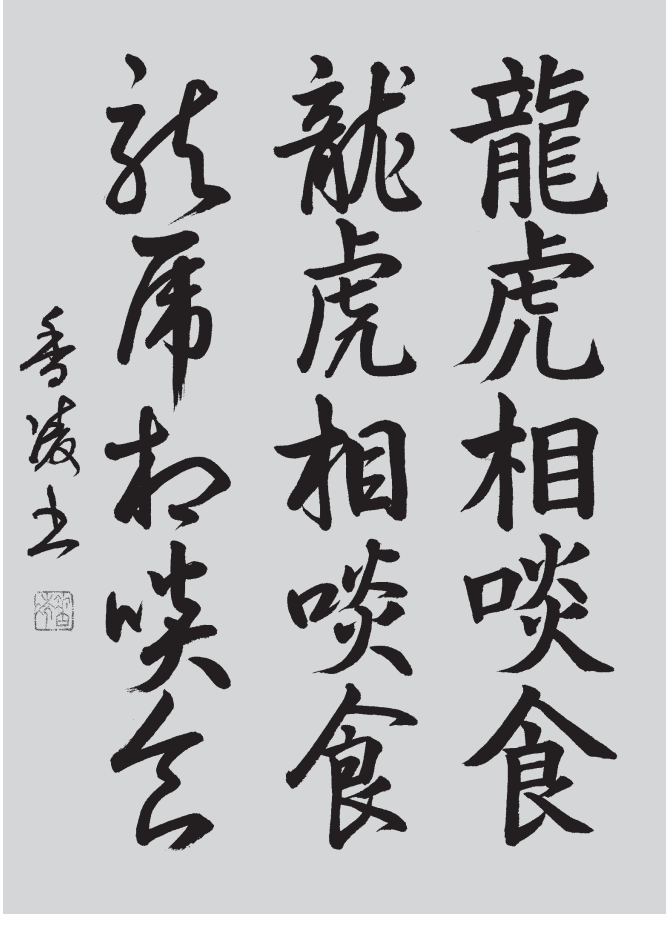


千峯の鳥路は梅雨を含めり
五月の蟬の聲は麦秋を送る
（李嘉祐）

⑴出品料550円　⑵バーコード券余白に「**漢か**」と記入

楷、行、草、三体課題参考（七月二十二日締切）

高橋香凌先生書



「無数の峰は梅雨を含んだ雲におおわれて、鳥の路さえも閉ざす。五月（陰暦）の蟬が鳴きはじめれば、麦秋の季節も終わりだ」という盛唐の詩人李嘉祐（七一九～七八一）の詩の読み下し文です。漢字部は墨をタップリと、そこに仮名を添えるように、そして前半部の密とは対照的に、「麦秋を…」をゆったりと書き込んでみました。藤原公任（九六六～一〇四一）が編纂した『和漢朗詠集』巻上「蟬」より

龍虎相啖食（李白）　竜虎　相い啖食し

訳…世はすべて、竜と虎とが食らいあうような乱世であった。

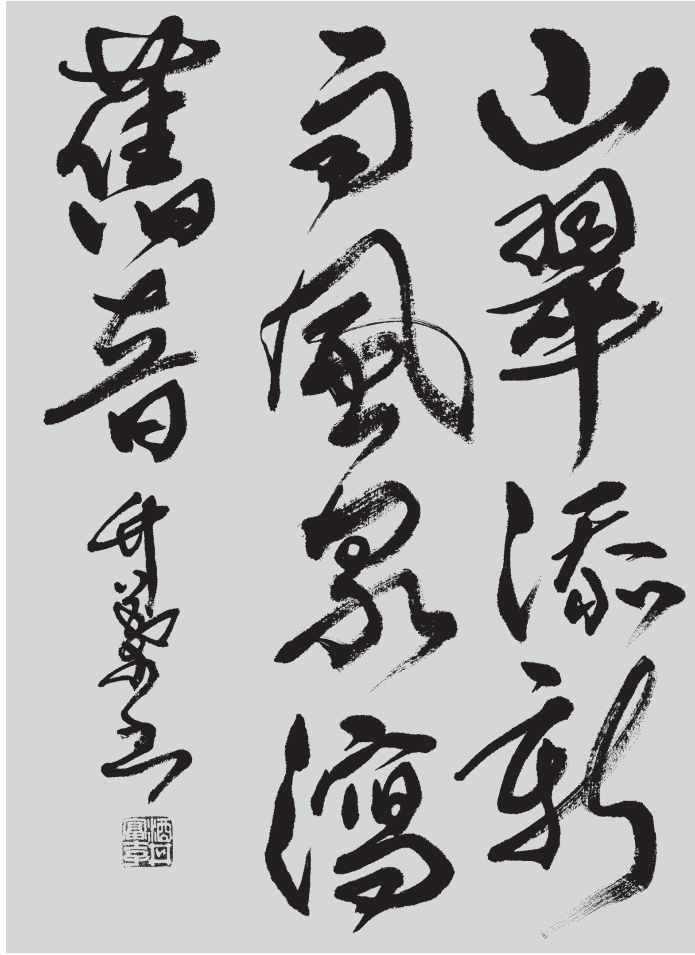
⑴随意部参考として出品してください。⑵会員外の出品料は460円。

随意部参考

酒井竹葉先生書

山翠添新雨　風泉瀉舊音（陳汾）

山翠新雨を添え、風泉旧音を瀉ぐ。



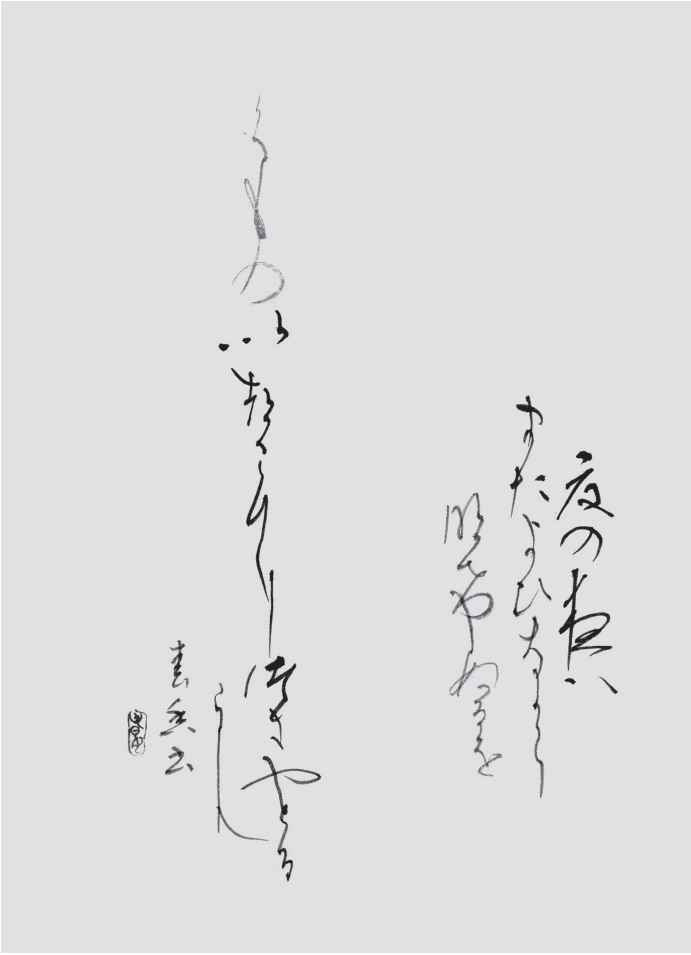
訳…新たに降った雨のために山の翠は増したが、風に伝わる泉の声は去年のように涼しく聞こえる。

随意部参考

石原春香先生書

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ（ん）（清原深養父）

夏の夜八まだよひ奈可ら明希ぬるを久もの以都こ耳徒支やどるら无

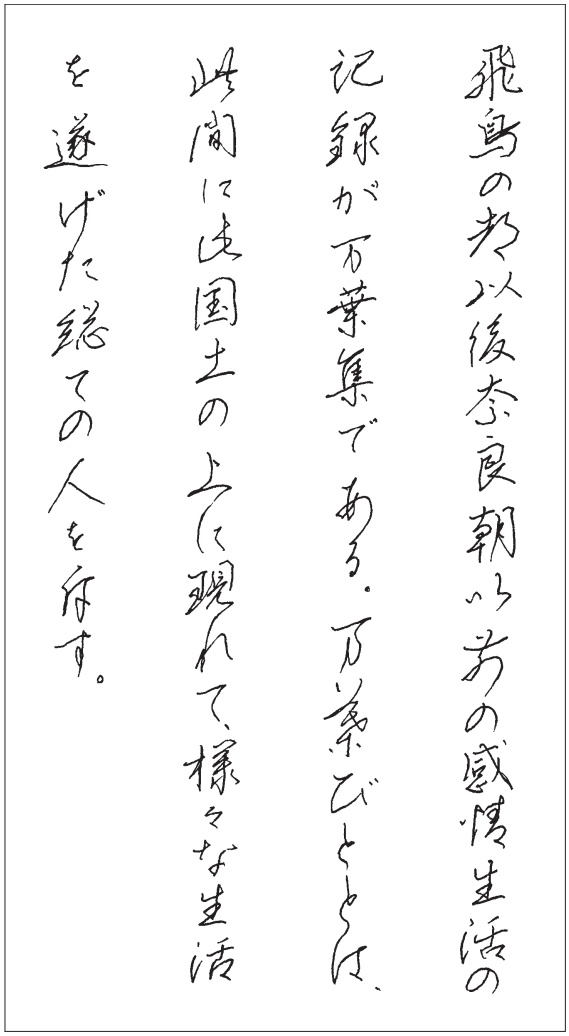


(1)随意部参考として出品してください。(2)会員外の出品料は460円。

硬筆部課題参考　（七月二十二日締切）

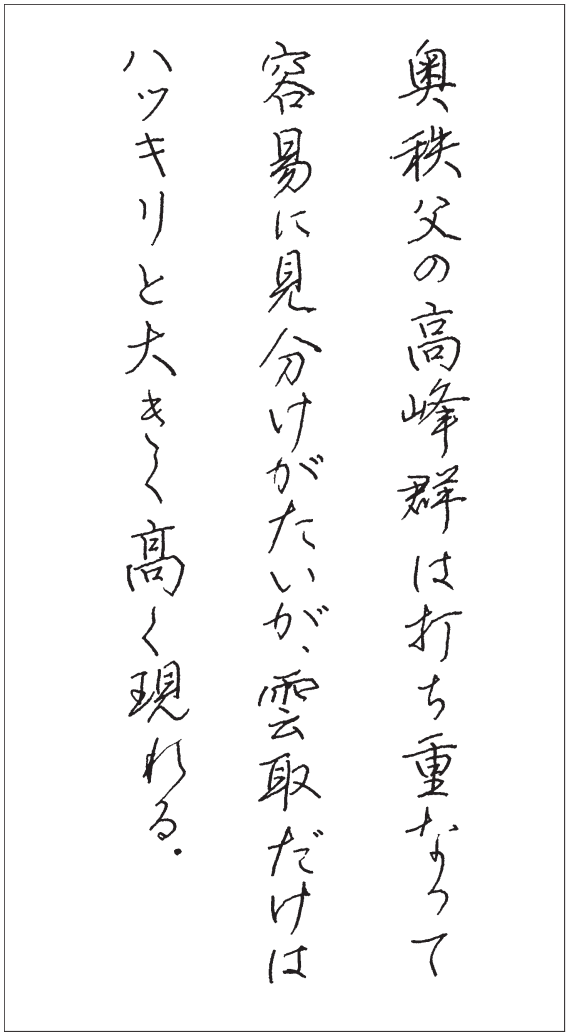
川上香蓉先生書

課題1（初段以上）



稲畑曄穂先生書

課題2（初段格以下）



課題1（初段以上）

飛鳥の都以後奈良朝以前の感情生活の記録が万葉集である。万葉びととは、此間（この）に此国土の上に現れて、様々な生活を遂げた総（すべ）ての人を斥（さ）す。

（折口信夫『万葉びとの生活』）

課題2（初段格以下）

奥秩父の高峰群は打ち重なって容易に見分けがたいが、雲取だけはハッキリと大きく高く現れる。

（深田久弥『日本百名山』）

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。
(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。
(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）
(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
(5) 会員は無料・会員外は四六〇円